



Tokyo Gakugei University Repository  
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	自閉スペクトラム症の児童における読書の傾向と心の理論との関係( fulltext )
Author(s)	藤野,博; 山本,祐誠; 松井,智子; 東條,吉邦; 計野,浩一郎
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 70(1): 479-488
Issue Date	2019-02-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/150973">http://hdl.handle.net/2309/150973</a>
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

## 自閉スペクトラム症の児童における読書の傾向と心の理論との関係

藤野 博\*<sup>1</sup>・山本 祐誠\*<sup>2</sup>・松井 智子\*<sup>1</sup>・東條 吉邦\*<sup>3</sup>・計野 浩一郎\*<sup>4</sup>

支援方法学分野

(2018年9月21日受理)

### 1 はじめに

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder, 以下 ASD) の人の心の理論の獲得は定型発達 (Typical Development, 以下 TD) の人とは質的に異なっているという知見がある。誤信念課題を解ける ASD 者は特別な方略を使ってそれを行っていることがその根拠とされている<sup>1)</sup>。そして, ASD 者の方が TD 者よりも誤信念課題を解くにあたり言語への依存度が高いことから, ASD 児は言語によるバイパスを経由して心の理論にアクセスするという仮説が提唱されている<sup>2)</sup>。また, 誤信念課題を解ける ASD 児はすべて言語的な理由付けができる一方, TD 児はそうではなかったことから, 言語的命題の積み重ねによる推論によって誤信念課題を解いている可能性が推察された<sup>3)</sup>。この可能性は介入実験によって検証されており, ASD 児に対しては言語的命題化による介入の効果があり, 語彙年齢が10歳レベルに達すると, 命題化された一般原理を意識的に活用できることが示唆された<sup>4)</sup>。

これらの知見は言語的な推論による心の読み取りの可能性を示唆するものといえる。実際, 言語を媒介とした ASD 児の社会的認知の支援は様々な形で行われている。ソーシャル・ストーリーはその一例である。ソーシャル・ストーリーとは社会的状況を記述した短い物語で, 社会的情報は ASD 児にとって明確な理解しやすいフォーマットで提示されなければならないという考えに基づく支援法である<sup>5)</sup>。それは ASD 者の視覚的学習の強さを活用し, 文字やイラストなどによっ

て情報が伝えられる<sup>6)</sup>。しかし, このような特別な技法のみならず, ASD 者は本など書かれたものから社会的知識を学んでいるという当事者自身の報告もある<sup>7)</sup>。

ASD 者は実体験よりも書かれたものから社会的な情報を得やすいのだとすれば, 読書経験は心の理論の発達に関係しているのではないだろうか。心の理論と読書との関連については定型発達者については研究がある。嘉数・池田・友利・識名・島袋・石橋 (2004) は幼児期における家庭での読書環境と心の理論の発達について検討した<sup>8)</sup>。就学前の幼児とその保護者に対し, 心の理論課題と読書環境に関する調査の質問紙を実施し, 読み聞かせの頻度や蔵書数が誤信念理解と関連していることを報告し, 読書経験が心の理論の獲得に関係していることを示唆している。

読書への好みという観点からの検討もある。Mumper and Gerrig (2017) は趣味の読書が心の理論を含む社会的認知の発達に良好な影響を与える可能性についてメタ分析研究を行った<sup>9)</sup>。それによると, 物語などのフィクションの作品を読む経験と読者の共感性および心の理論は関係があるとする仮説に基づく研究は多数あり, それらの多くでフィクションの読書の好みはノンフィクションに比べ, 社会的認知の測度と相関がみられた。そして, 共感性に関する指標よりも心の理論でより強い相関がみられたという。他方, ノンフィクションの読書は視点取得とは相関があった。これらの知見から, フィクションでもノンフィクションでも, 読書への好みは社会的認知の様々な側面と関

\*1 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

\*2 東京学芸大学大学院

\*3 茨城大学

\*4 武蔵野東教育センター

係していることが示唆された。

では、なぜフィクションと心の理論と関係するのだろうか。これに関しては、フィクションの特徴である主人公が話を進めていくナラティブの構造は社会的認知と強く結びついている<sup>10)</sup>、フィクションの読書において、読者は実世界の経験のシミュレーションをする<sup>11)</sup>、フィクションの本は、読者に登場人物の思考と感情を推測することを促進し、それは心の理論に益する<sup>12)</sup>、などの見解がある。

子安 (2016) は、心の理論の育成に関し、物語を通じて多様な人間関係のあり方を教えることの重要性を述べている。そして、物語が子どもの心の理論の成長を促し、逆に心の理論が物語理解を豊かにするという双方向の関係の重要性を指摘している<sup>13)</sup>。

読書の好みを調査する方法としてよく使われているのは Stanovich and West (1989) によって開発された「著者認知テスト (Author Recognition Test : ART)」である<sup>14)</sup>。この方法は、どのくらい本を読んでいるかについて自己報告してもらう形式に比べ、社会的に望ましい回答をするバイアスを避けられるメリットがある<sup>9)</sup>。

Mar, Oatley, Hirsh, dela Paz, and Peterson (2006) は ART を用い、フィクション (ロマンス, SF, ファンタジーなど)、ノンフィクション (科学, 実用本など) の様々なジャンルの著者を挙げ、知っている著者の同定を求める課題を実施し、フィクションの読書が共感性/社会的洞察の指標と関連していることを報告している。また、ART に近い測定法として、著者名でなく書名を知っているかを調べるタイトル認知テスト (Title Recognition Test : TRT) と呼ばれる手法もある<sup>15)</sup>。

以上のような定型発達者を対象とした心の理論と読書に関する研究はあるものの、ASD 者を対象とした系統的な研究は未だ行われていない。ASD 児は言語を媒介にして心の理論を獲得するという知見に基づくと、読書経験が ASD 児の心の理論の発達に影響を与えている可能性はありそうである。一方、自閉症スペクトラム指数 (AQ)<sup>16)</sup> にある「小説のようなフィクションを読むのはあまり好きではない」という項目には ASD 者のフィクションの読書を好まない傾向が示されているが、客観的な指標に基づく検証は行われていない。以上のような問題意識に基づき、本研究では ASD 児の読書経験、読書環境、読書の好みについて調査し、心の理論の発達との関係について TD 児と比較して検討することを目的とした。

## 2. 方法

### 2. 1 参加者

東京都 A 市の私立の B 小学校の小学 1 年生から 6 年生の ASD の診断を受けた児童 15 名 (男 13 名, 女 2 名) および定型発達の児童 15 (男 12 名, 女 3 名) 名を対象とした。ASD 群の生活年齢, 語い年齢, およびレブン色彩マトリックス検査の得点は表 1 の通りである。いずれの指標においても両群間に有意な差はなかった。

両群ともに研究参加者は B 小学校の保護者に向けて募集し応募した者を対象とした。研究の実施にあたっては保護者の書面での同意と、東京学芸大学研究倫理委員会の承認を得た。

表 1 参加者の生活年齢, 語い年齢, 非言語性知能

	生活年齢	語い年齢	RCPM
ASD 群	9歳8か月	8歳11か月	28.0
(SD)	19.5月	31.6月	6.6
TD 群	9歳1か月	9歳5か月	31.3
(SD)	20.4月	34.2月	3.6
	n.s.	n.s.	n.s.

### 2. 2 手続き

#### 2. 2. 1 心の理論課題

アニメーション版心の理論課題 ver.2 (藤野, 2013) を個別に実施した。この課題は全 5 課題 (それぞれ「サリーとアン課題」「スマーティー課題」「ストレンジ・ストーリー課題」「妨害と欺き課題」「ジョンとメアリー課題 (二次誤信念課題) に相当する課題) からなる。通過数を得点とした。

#### 2. 2. 2 タイトル認知テスト (TRT)

小学生にとって、著者名を同定する ART より回答しやすいと考えられる TRT を用いた。Cunningham & Stanovich (1990) の方法を参考に、第 1 著者と第 2 著者、およびその他の大学院生 1 名の計 3 名で協議し、小学生向けの TRT を作成した。まず、東京都 S 区の図書館に設置されている小学生用学級文庫 (低学年向け 383 冊, 中学年向け 323 冊, 高学年向け 327 冊) の中から、なるべくジャンルが偏らぬよう各 10 冊ほどを目安に候補を選んだ。そして Amazon に登録されていて一般購入できるものだけを残した。その結果、合計 32 冊の本がリストされた。そのリストを参加児に提示し、知っている本と読んだことのある本、のそれぞれのチェック欄に丸をつけるよう求め

た。

### 2. 2. 3 読書環境に関する質問紙

秋田・無藤 (1996) に基づいて以下のような項目を設定し、保護者に回答を求めた。①家庭にある子どものための本の数 (0冊: 0点, 1-20冊: 1点, 21-50冊: 2点, 51-100冊: 3点, 100冊以上: 4点), ②保護者から見た子どもの読書の好み (好きではない: 0点, あまり好きではない: 1点, 好き: 2点, とても好き: 3点), ③子どもが図書館や本屋に行く頻度 (行ったことがない: 0点, 年に1回: 1点, 半年に1回: 2点, 1か月に1回: 3点, 1週間に1回: 4点, 1週間に数回: 5点), ④幼児期の読み聞かせの頻度 (したことがない: 0点, たまにしていた: 1点, ほとんど毎日していた: 2点, 毎日していた: 3点)。

### 2. 2. 4 読書についてのアンケート

教研式 Reading Testの「読書についてのアンケート」を参加児に実施した。低学年用, 中学年用, 高学年用のうち, 該当する学年用のものを使用した。かな, 漢字の表記や回答の仕方などは年齢相応に調整されているが質問項目自体はどの学年用も同一である。全13項目について4件法 (とてもそう思う: 4点, 少しそう思う: 3点, あまりそう思わない: 2点, 全くそう思わない: 1点) で回答を求めた。質問13と14は逆転項目である。

## 2. 3 分析法

### 2. 3. 1 心の理論課題

課題通過数を得点とし, 両群間の平均値の差をt検定によって分析した。

### 2. 3. 2 読書に関する諸変数

TRTについてはフィクションの本, ノンフィクションの本に分けて集計した。分類はリストを作成した3名で行い, それを教育学部の学生と大学院生計6名に確認してもらった。その結果, フィクションが20冊, ノンフィクションが12冊となった。そして, 知っている本を「認知」, 読んだことのある本を「既読」として分類し, それぞれの数を集計した。読書環境に関する質問紙については, 各下位項目の得点を求めた。「読書についてのアンケート」は全13問の各項目について得点を求めた。

以上の各測度について平均値と標準偏差を求め, 両群間の平均値の差をt検定によって分析した。

### 2. 3. 3 心の理論と読書に関する諸変数の関係

フィクションとノンフィクションの本のTRTにおける認知と既読, 読書環境についての質問紙の各項目, 「読書についてのアンケート」における各質問項目の得点と心の理論課題通過数との相関をTD群とASD群のそれぞれについて求めた。

## 3. 結果

### 3. 1 心の理論課題

心の理論課題の通過数の平均値 (標準偏差) はTD群が3.67 (1.29), ASD群が2.40 (1.84) であった (図1)。両群間に有意差がみられた ( $t=2.18$ ,  $df=25.07$ ,  $p<.05$ )。

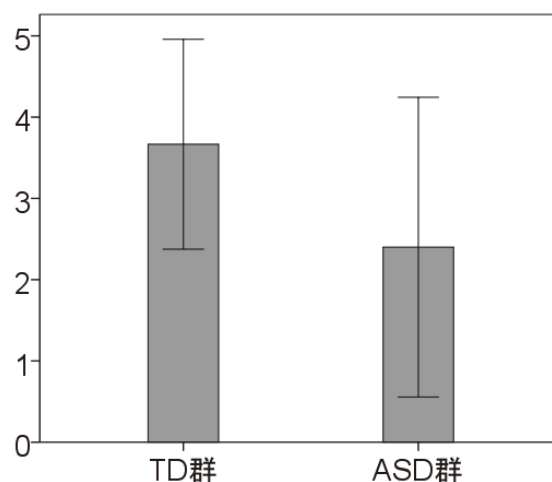


図1 心の理論課題通過数の平均値

### 3. 2 TRT

各指標の平均値 (標準偏差) は, フィクションの認知がTD群は11.87 (4.44), ASD群は8.73 (4.10), 既読がTD群は8.47 (3.02), ASD群は6.27 (2.52) であった。また, ノンフィクションの認知がTD群は3.27 (2.87), ASD群は1.53 (1.51), 既読がTD群は1.73 (1.71), ASD群は0.73 (0.96) であった。フィクションの既読で有意差がみられた ( $t=2.17$ ,  $df=28$ ,  $p<.05$ )。それぞれの得点分布を示した箱ひげ図を図2-1から図2-4に示した。

### 3. 3 読書環境に関する質問紙

「家庭にある子どものための本の数」「保護者から見た子どもの読書の好み」「子どもが図書館や本屋に行く頻度」「幼児期の読み聞かせの頻度」の回答結果を図3-1から図3-4に示した。いずれの測度においても両群間に有意差はみられなかった。

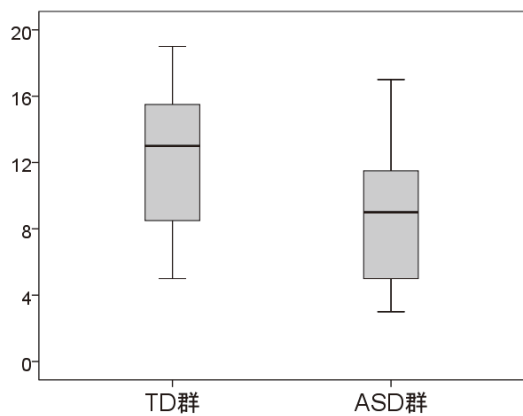


図2-1 フィクション本の認知数の分布

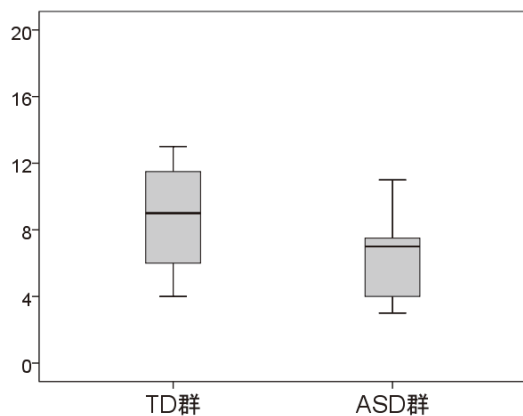


図2-2 フィクション本の既読数の分布

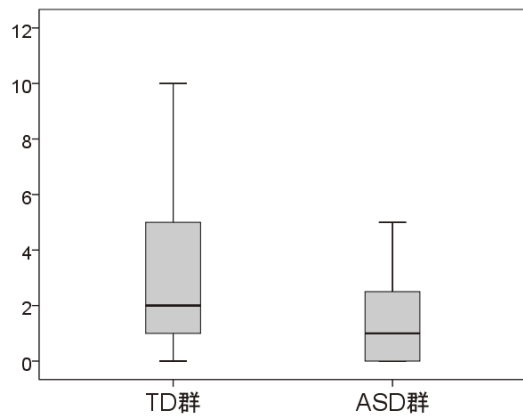


図2-3 ノンフィクション本の認知数の分布

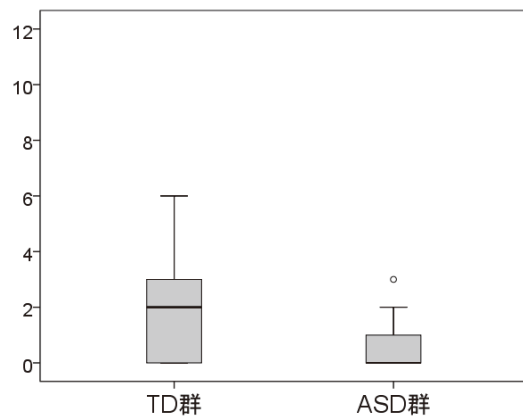


図2-4 ノンフィクション本の既読数の分布

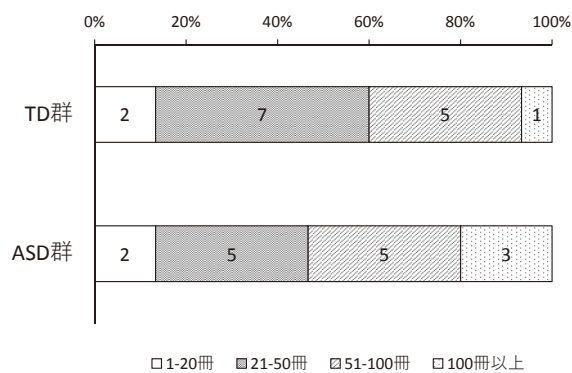


図3-1 家庭にある子どものための本の数

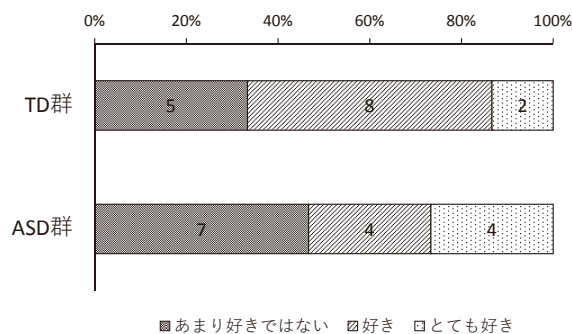


図3-2 保護者から見た子どもの読書の好み

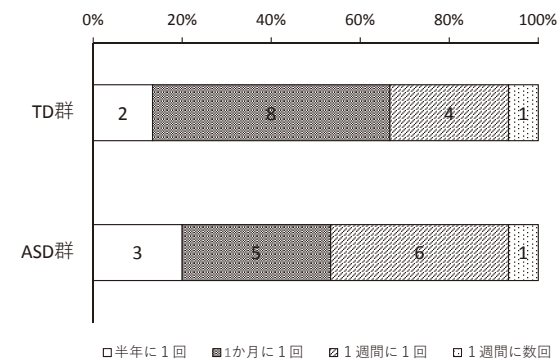


図3-3 子どもが図書館や本屋に行く頻度

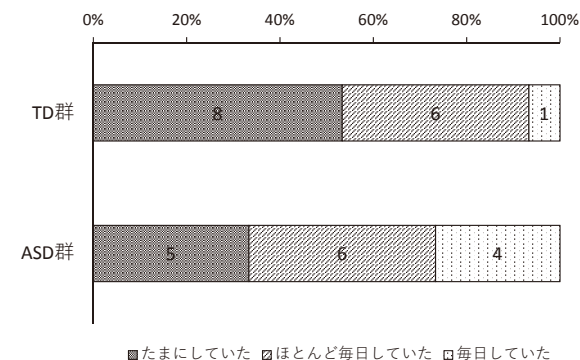


図3-4 幼児期の読み聞かせの頻度

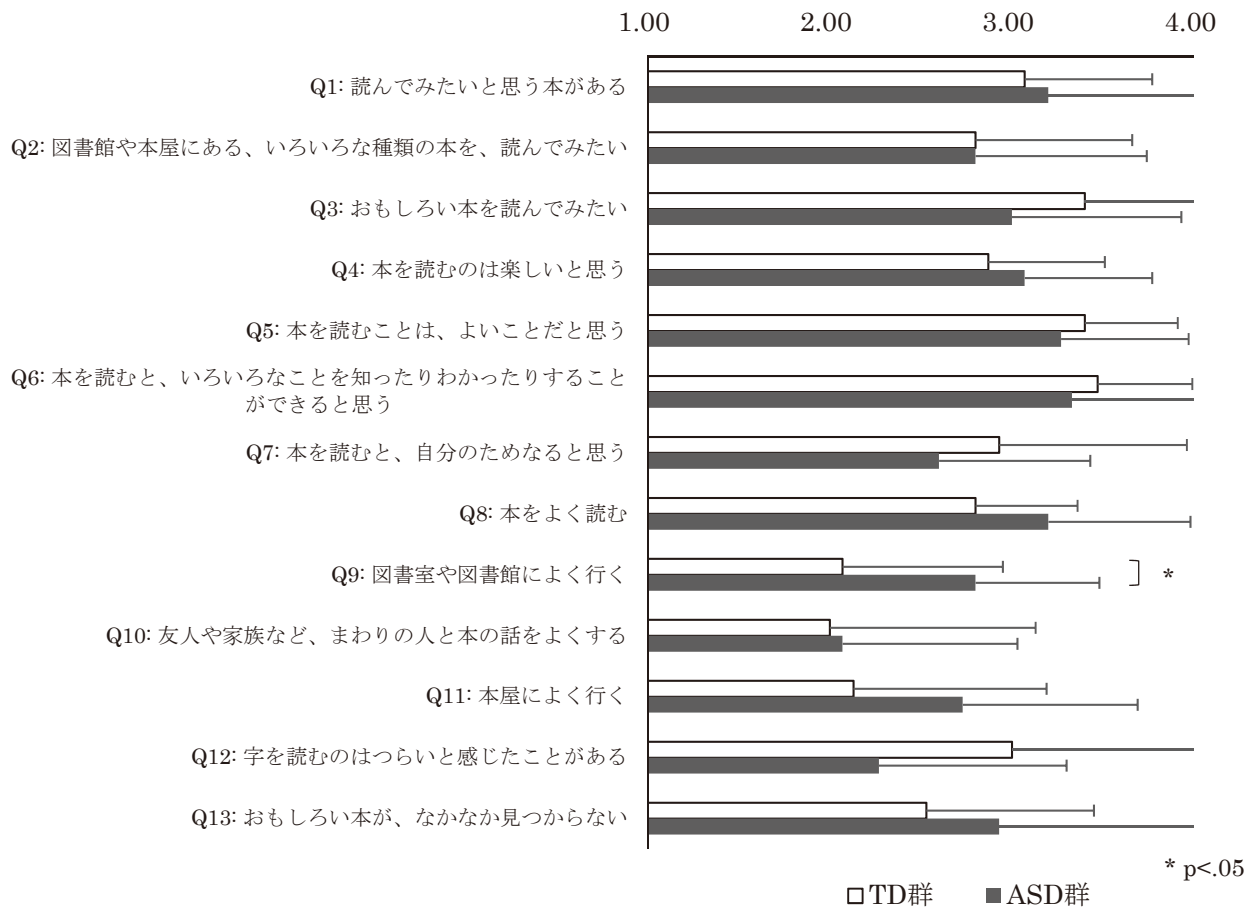


図4 「読書についてのアンケート」各項目の平均得点

### 3. 4 読書についてのアンケート

TD群とASD群の「読書についてのアンケート」の結果を図4に示した。Q9「図書室や図書館などによく行く」でのみ両群間に有意な差が見られた ( $t=2.55$ ,  $df=28$ ,  $p<.05$ )。平均値 (標準偏差) はTD群が2.07 (0.88), ASD群が2.80 (0.68)であった。ASD群が高かった。その他の項目では有意差はみられなかった。

### 3. 5 心の理論と読書に関する諸変数の相関

心の理論課題の通過数とTRT, 読書環境に関する質問紙, 「読書についてのアンケート」のそれぞれの項目の得点との相関係数を求め, 表2に示した。

TD群においては心の理論課題成績と「Q11: 本屋によく行く」との間に正の相関が, 「Q12: 字を読むのはつらいと感じたことがある」(逆転項目)との間に負の相関がみられた。また, ASD群では, 心の理論課題とフィクションの認知数との間に有意な正の相関がみられた。

## 4. 考察

言語発達の指標としたPVT-Rの語い年齢と非言語性知能の指標としたRCPMの得点のいずれにおいても両群間で有意差はなかった。一方, 心の理論課題においては有意差がみられた。これらのことから, 本研究における読書に関する諸測度でのTD群とASD群の違いは, 言語や知能でなく心の理論/社会的認知の側面と関連づけて考察することができるだろう。

最初に家庭の読書環境について「読書環境に関する質問紙」の結果をみると, 「家庭にある子どものための本の数」「保護者から見た子どもの読書の好み」「子どもが図書館や本屋に行く頻度」「幼児期の読み聞かせの頻度」のいずれにおいても両群間に有意差はみられなかった。この結果からは, 本が日常的にどれだけ身近にあり, アクセスしやすいか, に関して両群の違いはないことを示している。本研究で対象とした児童は私立の1小学校に在籍し, 家庭の社会・経済的な位置に大きな差がなく, いずれの群の児童も同じくらい日常的に本に接しているようである。そして, 保護者

表2 心の理論課題と読書に関する諸測度の相関

		TD群		ASD群	
TRT	認知	.50	n.s.	.55	p<.05
フィクション	既読	.30	n.s.	.25	n.s.
TRT	認知	.16	n.s.	.33	n.s.
ノンフィクション	既読	-.08	n.s.	-.10	n.s.
読書環境に関する 質問紙	子どもの本の蔵書数	-.09	n.s.	-.22	n.s.
	子どもの読書の好み	.00	n.s.	-.35	n.s.
	図書館等に行く頻度	-.05	n.s.	.43	n.s.
	読み聞かせの頻度	.06	n.s.	-.42	n.s.
読書についての アンケート	Q1	.50	n.s.	.22	n.s.
	Q2	.26	n.s.	.17	n.s.
	Q3	.26	n.s.	-.13	n.s.
	Q4	.03	n.s.	.09	n.s.
	Q5	.00	n.s.	.24	n.s.
	Q6	.36	n.s.	.27	n.s.
	Q7	-.02	n.s.	.07	n.s.
	Q8	.30	n.s.	-.16	n.s.
	Q9	-.17	n.s.	-.45	n.s.
	Q10	.24	n.s.	-.22	n.s.
	Q11	.61	p<.05	-.46	n.s.
	Q12	-.57	p<.05	-.36	n.s.
	Q13	-.22	n.s.	-.01	n.s.

から見た子どもの読書の好みにも差はなかった。本に触れる機会や好みは両群ともに同じ程度であったと考えられる。

次いで、参加児自身が読書に対してどのような印象をもっているかを知ることができる「読書についてのアンケート」の結果をみると、1項目を除いて有意差はなかった。つまり、参加児自身による回答でも、読書への興味や動機づけなどに両群間の差はないといえる。ただし、「Q9：図書室や図書館によく行く」でのみ有意差がみられ、この項目ではASD群の平均値がTD群の平均値を上回る結果となった。TD群の平均値は2.07であり、ASD群は2.80であった。本尺度の2点は「あまりそう思わない」であり否定の側、3点は「少しそう思う」であり肯定の側である。このことから、TD群は否定寄り、ASD群は肯定寄りの回答であったといえる。「読書環境についての質問紙」での図書館などに行く頻度では差がなかったため、これは地域の図書館でなく在籍する学校の図書室に行く頻度の問題だと考えられる。つまりTD児は図書室にさほど行っていないが、ASD児はよく行っているということである。休み時間などに一人で図書室で過ごすことがTD児より多いのだろう。ASD児にとって図書室

は一人で落ち着ける場所になっていることが考えられる。自閉症スペクトラム指数(AQ)に「パーティーなどよりも、図書館に行く方が好きだ」という項目があるが<sup>16)</sup>、本研究の結果はそのようなASD者の示す傾向と一致している。

参加児の実際の読書経験について調べるTRTにおいては、「認知」すなわち題名を知っている本の数は、フィクションでもノンフィクションでも両群間の有意な差はなかった。しかし、「既読」すなわち読んだことのある本の数では、フィクションにおいて有意差がみられた。つまり、フィクションに関してはASD児もTD児と同程度に本の題名は知っているものの、実際に読んでいる量はTD児の方が多という結果であった。これはAQの項目「小説のようなフィクションを読むのはあまり好きではない」という傾向と一致している。知ってはいるが読んではいないということは、それらの本の内容を知りたいと思うほどには興味がないことを意味する。このことから、ASD児はフィクションの本の読書にTD児ほど動機づけられないことが示唆されるが、それはフィクションの本全般に当てはまるわけではなく、ASD児の非定型的な嗜好性を考慮に入れると、本研究で使用したリストの中には

読んでみたいものがなかったことも考えられる。その可能性は最近の研究の知見からもうかがえる。

たとえば, Komeda, Kosaka, and Okazawa (2017) は, 物語の登場人物の気持ちがどれくらい理解できるかについて検討し, TD者はASD的人物よりもTD的人物の気持ちが理解できるのに対し, ASD者はTD的人物よりもASD的人物の気持ちが理解できることを示した<sup>17)</sup>。本研究のTRTのリストは学級文庫の定番本から選んだが, それらの多くはTD的な人物が主人公となっているだろう。そのため, ASD児にとっては読みたいほどの興味が湧かないのかもしれない。興味がないのになぜ本の題名を知っているのかについては, 後に図書室によく行く傾向と関連づけて論じる。

さて, 本研究のもうひとつの論点である読書と心の理論の関係について考察する。TD群においてはTRTでは, どの項目でも有意な相関はみられなかった。読書アンケートでは, 「Q11: 本屋によく行く」との間に正の有意な相関が, 「Q12: 字を読むのはつらいと感じたことがある」(逆転項目)との間に負の有意な相関がみられた。本屋に行くことは, 読みたい本を自分から求めに行く行為であり, 読書に向かう能動的な姿勢の現れと考えられる。TD児では読書への動機づけと心の理論との関連が示唆される。子安が指摘しているように, 本を読むことが心の理論を育て, 逆に心の理論が本を読むことへの動機を高めていると考えられる。しかし, フィクションの認知数も既読数も心の理論とは関係しておらず, この結果はメタ分析研究のまとめ<sup>18)</sup>と一致しなかった。本屋によく行くということは, 読書の幅が広く, 学級文庫の定番本では満足せず, それを超えて読みたい本が数多くあるということであろう。心の理論が高い水準に発達した児童は, 本研究のTRTにリストされた学級文庫の定番本に留まらず, 幅広くたくさんの本を読んでいるため, 一種の天井効果が生じ, 相関が出なかったのかもしれない。また, これまでの研究の多くは知っている著者を同定するARTを使用しており, 本研究で使った知っている本を同定するTRTとは異なる。そのような方法の違いが結果に影響していた可能性もある。

一方, ASD群においてはTRTのフィクションの本の題名を知っていることと心の理論との間に有意な相関がみられた。本の題名を知っているということはその本への興味の芽生えを意味するのではないだろうか。ASD児においては, フィクションの本への興味が湧く時期と心の理論の発達時期が一致しているのではないかと考えられる。

そして, ASD児が図書室によく行く傾向とも併せ

て考えると, 一人で落ち着ける場所を求めて図書室に行っているのかもしれないが, そこに居る間に, 本の背表紙にある題名を繰り返し見かけていることが推測できる。そして, それが繰り返されるうちに, それらの題名が記憶に留まるのではないか。また, 記憶のされやすさが対象への興味の程度に伴うならば, 本への興味の芽生えが題名を記憶しやすくし, それは心の理論の発達に伴っていることが推察される。心の理論の発達はフィクション作品への興味を喚起し, それによって題名が記憶される可能性が考えられる。読書がASD児の心の理論の発達を促進するのではないか, という仮説が本研究の当初の問題設定であったが, 既読数でなく認知数が心の理論に関係しているという結果からは, 心の理論の発達がフィクションの本への興味を高めるという因果関係の方が説明しやすい。しかし, いずれにせよ, これは本研究のデータから検証できる範囲を超える議論であり憶測の域を出ない。

## 5. まとめと本研究の限界

本研究の結果から, 以下のことが明らかとなった。(1) 言語や知的発達レベルが同等で, 家庭の読書環境が同様である場合, 本を読むことへの好みや動機づけにおいてASD児はTD児と差がない。(2) フィクションの本に関してはTD児のほうがASD児よりも多く読んでいる。(3) ASD児においては, 心の理論の発達と知っているフィクションの本の量との間に正の相関がある。そして, 読むまでには至らないが知っていることは, その本への興味の芽生えと考えることができ, それは心の理論の成長に伴っている可能性が考えられた。

本研究の問題点としては, TRTで取り上げた本数が少ないことが挙げられる。リストする本数を抑制した理由は, たくさん挙げすぎると, 回答への集中が維持できないことを懸念してのことであったが, リストの中には読んだことのある本が入っていないことが多かったのかもしれない。読書の環境や好みなどに差がないにも関わらず, リストにある本の既読数が少なかったことから, その可能性は大きいだろう。限定された興味を特性とするASD者の好みに応じられるほどの本を広くカバーできなかったのではないか。学級文庫の定番本は定型発達児の標準に基づくもので, ASD児のニーズには応じられなかったと考えられる。また, ノンフィクションでは既読数に両群間の有意差がなく, 両群ともに非常に少数であったが, 特にノンフィクションはカバーする範囲が非常に広く, それら



を網羅することは現実的に難しい。マニア向けのものも含め、多量の本を網羅できれば結果は変わっていたかもしれない。しかし、例えば特定のジャンルの図鑑、たとえば動物図鑑ひとつ取っても、様々な出版社から刊行されており、各社の動物図鑑をすべて挙げると膨大で冗長なリストにならざるをえない。そして、回答する子どもの側も出版社の違いまで認識して回答仕分けるのは困難であろう。

また、もうひとつの可能性として、ASD児はその特性から、ごく限られた量の本を好んで繰り返し読むことも考えられる。読んだ本の量だけで読書経験の質を判断できないことも考慮する必要がある。

### 謝辞

本研究はJSPS科研費（課題番号：17K04920，研究代表者：藤野 博）の助成を受けた。

### 文献

- 1) Frith, U., Happé, F., & Siddons, F. : Autism and theory of mind in everyday life. *Social Development*, 3, 108-124, 1994 秋  
田喜代美・無藤 隆：幼児の読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討, *教育心理学研究*, 44, 109-120, 1996.
- 2) Tager-Flusberg, H., & Joseph, R.M. : How language facilitates the acquisition of false-belief understanding in children with autism. In J.W.Astington, & J.A.Baird (Eds.) *Why language matters for theory of mind* (pp.298-318). Oxford (Oxford University Press), 2005
- 3) 別府 哲・野村香代：高機能自閉症児は健常児と異なる「心の理論」を持つのか：「誤った信念」課題とその言語的理由付けにおける健常児との比較, *発達心理学研究*, 16, 257-264, 2005
- 4) 藤野 博・松井智子・東條吉邦・計野浩一郎：言語的命題化は自閉スペクトラム症児の誤信念理解を促進するか？：介入実験による検証, *発達心理学研究*, 28, 106-114, 2017
- 5) Gray, C.A. & Garand, J.D. : Social stories: improving responses of students with autism with accurate social information, *Focus on Autistic Behavior*, 8, 1-10, 1993
- 6) Gray, C.A. : Social stories and comic strip conversation with students with Asperger syndrome and high-functioning autism. In Schopler, E., Mesibov, G.B., & Kuncie, L.J. (Eds.) *Asperger Syndrome or High-Functioning Autism?* pp.167-198, New York: (Plenum Press), 1998
- 7) Jackson, L. : *Freeks, geeks, & Asperger syndrome: A user guide to adolescence*. London (Jessica Kingsley Publishing Ltd.), 2002
- 8) 嘉数朝子・池田尚子・友利久子・識名真紀子・鳥袋恒男・石橋由美：家庭での読書環境が心の理論の発達に及ぼす効果, *琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要*, 6, 87-97, 2004
- 9) Mumper, M.L., & Gerrig, R.J. : Leisure reading and social cognition : A meta-analysis. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*, 11, 109-120, 2017
- 10) Mar, R. A., Oatley, K., Hirsh, J., de la Paz, J., & Peterson, J.B. : Bookworms versus nerds : Exposure to fiction versus non-fiction, divergent associations with social ability, and the simulation of fictional social worlds. *Journal of Research in Personality*, 40, 694-712, 2006
- 11) Mar, R. A., & Oatley, K. : The function of fiction is the abstraction and simulation of social experience. *Perspectives on Psychological Science*, 3, 173-192, 2008
- 12) Kidd, D.C., & Castano, E. : Reading literary fiction improves theory of mind. *Science*, 342, 377-380, 2013
- 13) 子安増生：いまなぜ「心の理論」を学ぶのか。子安増生編著。「心の理論」から学ぶ発達的基础：教育・保育・自閉症理解への道, 京都 (ミネルヴァ書房), pp.3-16, 2016
- 14) Stanovich, K.E. & West, R.F. : Exposure to print and orthographic processing. *Reading Research Quarterly*, 24, 402-433, 1989
- 15) Cunningham, A.E. & Stanovich, K.E. : Assessing print exposure and orthographic processing skill in children: a quick measure of reading experience, *Journal of Educational Psychology*, 82, 733-740, 1990.
- 16) 若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S., & Wheelwright, S. : 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化 - 高機能臨床群と健常成人による検討 - . *心理学研究*, 75, 78-84, 2004
- 17) Komeda, H., Kosaka, H., & Okazawa, H. : Empathy and helping behaviors in narrative comprehension: Comparison between adults with autism spectrum disorder and typically developing adults. *Proceedings of the 27 th Annual Meeting of the Society for Text and Discourse (Philadelphia, USA)*, 2017

# 自閉スペクトラム症の児童における読書の傾向と心の理論との関係

## The tendency of reading books and its association with the theory of mind in children with autism spectrum disorder

藤野 博\*<sup>1</sup>・山本 祐誠\*<sup>2</sup>・松井 智子\*<sup>1</sup>・東條 吉邦\*<sup>3</sup>・計野 浩一郎\*<sup>4</sup>

Hiroshi FUJINO, Yuusei YAMAMOTO, Tomoko MATSUI,  
Yoshikuni TOJO and Koichiro HAKARINO

支援方法学分野

### Abstract

We investigated the tendency of reading books and its association to the theory of mind in children with autism spectrum disorder (ASD) in comparison to typically developing (TD) children. The participants included 15 children with ASD and 15 TD children. The mean age of both groups was nine years old. The verbal ages and RCPM scores were matched in both groups. The participants completed the animation version of the theory of mind test, the Title Recognition Test (TRT) and the Questionnaire on Reading Books, which is included in the Kyoken-shiki Reading-Test. The TRT included the actual titles of children's books; the participants put marks next to the titles of the books they knew and had read. In the questionnaire, preferences for reading books were assessed. The participants' parents completed a questionnaire on reading books in the home environment. The ASD group passed significantly fewer 'theory of mind' tasks than the TD group did. The ASD group read significantly fewer fiction books than the TD group did. In the ASD group, there was a significant correlation between the number of fiction books that were recognized and the number of theory of mind tasks that were passed. The state that they have never read but knew the titles of the books is considered to be a spark of interest in the books. The results suggest that an interest in fiction books develops in conjunction with the development of the theory of mind in children with ASD.

**Keywords:** autism spectrum disorder, reading books, theory of mind, fiction

*Department of Support Methods for Special Needs, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 自閉スペクトラム症 (ASD) における読書の傾向について調査し, 心の理論の関係について定型発達

---

\*1 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)

\*2 Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

\*3 Ibaraki University

\*4 Musashino Higashi Center for Education and Research

(TD) 児と比較して検討した。小学1年生から6年生のASDの診断を受けた児童15名および定型発達の児童15名を対象とした。両群ともに平均生活年齢は9歳であった。語い年齢とRCPMで測定した非言語性知能を統制した。アニメーション版心の理論課題を実施し通過数を得点とした。読書経験については、小学生によく読まれる本からなるリストを作り、知っている本と読んだことのある本に丸をつけるよう参加児に求め、フィクションとノンフィクションに分け、その数を得点とした。読書の好みについては教研式Reading-Testの「読書についてのアンケート」への回答を参加児に求めた。また、家庭の読書環境に関する質問紙への回答を保護者に求めた。心の理論課題の通過数と読んだことのあるフィクションの本の数はTD群の方がASD群より有意に多かった。また、ASD群において心の理論課題通過数と知っている本の数との間に有意な正の相関がみられた。読むまでには至らないものの知っているという状態は本への興味の芽生えと考えられる。ASD児において、心の理論の発達に伴ってフィクションの本への興味が生じる可能性が示唆された。

キーワード: 自閉スペクトラム症, 読書, 心の理論, フィクション